

「生徒の主体的取組を核とした課題探究的な自律的学習」に関する授業 令和新時代における授業スタイル～誰一人取り残さない未来への教育実践へと広げる取組～

札幌市立南が丘中学校 教諭 佐久間 勇 史

1 はじめに 研究の目的

グローバル化、情報化、科学技術の進歩が加速し、世界的にもSDGsで定めた2030年まで10年をきり、誰一人取り残さない持続可能な発展の重要性が日に日に高まってきている。そのような中、筆者は中国政府日本教職員招聘プログラム（2017年5月国際連合大学）、マレーシア教師海外研修（2018年JICA北海道）を通して海外の教育事情を視察し、生徒が主体的に学習活動に取り組む、新時代に対応した授業を提案し実践してきた（JICA地球ひろば 中学校の実践事例・学習指導案：2030年SDGsを達成するために）。

一方、筆者が勤務する札幌市では、2017年に「課題探究的な学習」の推進方針を発表した。これは、「課題探究的な学習」を「自ら疑問や課題をもち、主体的に解決する学習」と定義している。この課題探究的な学習のより一層の充実を図ることが新学習指導要領の趣旨（主体的・対話的で深い学び）に沿った授業を実現することにつながると考え、中学社会科の授業を中心としながら他教科にも応用できる授業を考えたい。

2 研究計画・方法

3年計画で研究を進めた。授業計画と授業実践及び校内研修会での発表等、PDCAサイクルの確立を研究の中心とし、研究当初と最後に同一生徒にアンケートをとり、変容を3年間の成長の姿で捉えた。

1年目2019年度 主体的な学びを核とした授業

2年目2020年度 対話的な学びをより意識した授業

3年目2021年度 深い学びをより意識した授業

3 研究内容

(1) 授業計画～新しい授業スタイルの立案

1997年に宮城教育大学大学院教育学研究科を修了したが、その際、恒常的に同じスタイルで授業を行うことにより、学習意欲が続く限り生徒の知識定着度が高まることを学んだ。そのため本研究では、生徒の主体的取組を核とする新しい授業スタイルの構築と定着を考えたい。

① 現状の把握、方向性の確認

新しい授業スタイルの実施にあたり、アンケート調査を行った（2019年7月中学1年100名回答）。主な結果は以下の通りである。

質問1：社会科の授業は楽しい。【はい42%・いいえ19%・どちらでもない39%】

質問2：これまでの社会科の授業は、主体的に取り組むことができる授業である。【はい16%・いいえ84%】

質問3：これまでの社会科の授業は、対話的に取り組むことができる授業である。【はい21%・いいえ79%】

質問4：これまでの社会科の授業は、より深く学べる授業である。【はい14%・いいえ86%】

質問5：課題を挙げるとすればどんな点ですか。

- ・自分で調べて発表し、他のみんなの考えを知りたい。
- ・もっと覚えられるようにして社会の成績を上げたい。
- ・黒板を写すだけのノートになっているので、もっと工夫したい。

アンケート調査の結果から生徒たちは、

- 自分で調べて発表したい
- 他者の考えも知りたい
- ノートの記述内容を自分なりに工夫したい
- 理解力を高めたい

という気持ちをもっていることが把握できた。

このような結果と、学習指導要領及び課題探究的な学習の充実を念頭に新しい授業スタイルを考え、提案することとした。

② 新しい授業スタイル（以下、S授業と略す）

※S授業：self-directed learning, 主体的のSの意味
S授業について、心がけたことは以下の通りである。

- 課題（学習目標）を明確にして全員が把握できる
- 授業の形式が誰でもわかりやすく実行可能である
- 生徒自身による工夫の余地を大いに残している
- 課題探究の方法が多様である
- ICTの積極的かつ有効的な活用に対応している

- f. 主体的に課題解決を図り、皆と共有できる
- g. インクルーシブ教育にも対応している

活動6：振り返り・まとめを行い、評価する。

a～gの視点を踏まえて1時間の授業を考えた。

I) 学習目標

- ・主体的に（自分から意欲的に）学ぶ
- ・対話をして（意見交換をして）学ぶ
- ・深く（新しい発見、話を聞いて視野を広げて）学ぶ

II) S授業

毎時間、中心発表者（生徒1名）と発表者以外に分けて学習活動を行った。中心発表者は学級全員に単元ごとに割り当て（生徒の主体的な学習意欲を尊重するため希望を優先した）、最終的には全員が発表できるように事前に支援した。

【中心発表者】（括弧内は授業内の時間配分）

- ・授業前：予め単元について調べておき、板書計画を立てる（教師が事前に確認し打合せを済ませる）。
- ・授業での動き
 - 活動1：教室の前方に立ち、授業をリードする
⇒学習課題の提示と課題追究の開始の指示（2分）
 - 活動2：板書（23分）
 - 活動3：説明・まとめ（10分）
 - 活動4：補足、質問をたずねる（2分）
 - 活動5：先生の補足説明、評価を聞く（10分）
 - 活動6：自己の振り返り（3分）

【発表者以外】（下の活動の数字は上記活動に対応）

- ・授業前：教科書、ノートを開いておく。
- ・授業での動き
 - 活動1：発表者の話を聞き課題を把握する（2分）
 - 活動2：学習課題を確認し、課題追究を行う。班活動として調査テーマを分担し、それぞれが課題追究を行って、班内で課題解決を図る。自分なりに工夫してノートにまとめ、意見交流を経て仲間の良い部分を取り入れる。
 - 活動3：発表者の説明を聞きながら、自分の班の学習内容と比較する。必要な部分を付け足す。
 - 活動4：発表者の足りないところを補足説明する。分からないところを質問する。
 - 活動5：先生の説明を聞き、必要な部分を付け足す。

(2) 授業実践

① 主体的な学びを核とした授業（1年目）

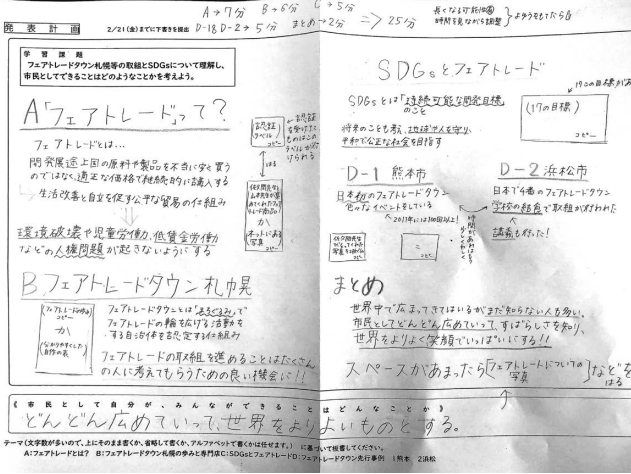
まずは教師が手本を丁寧に示し、「これならできそうだ」と思わせるところからスタートした。その後、S授業を実践した。生徒の主体性を生かし、学級や班内でも自分が学びたい項目を積極的にアピールさせ、自分なりに工夫してまとめ、責任をもって発表させ、適切な評価（教師がノート点検時に個々にコメントを記入し、中心発表者の生徒には多くの良い点と課題を1つ提示する）を与えることで、充実感、自己有用感をもたせる指導を心がけた。生徒による素晴らしい取組や発表については、授業の様子を表す写真を廊下に掲示したり、他の学級にも知らせたりするなどして啓発を図った。校内研修会においても授業を公開することで、S授業が主体的な学びを促進する授業の一形態であるということを教職員内で共有することができた。

▼ [生徒による板書例]



フェアトレードタウンさっぽろとSDGsに関する授業も行った。(2020年2月27日 協力：浜松市教委)

▼ [生徒による板書計画例]



浜松市立学校の授業実践の資料を基に板書計画を生徒自らの力で組み立てる生徒の様子も見られた。個々にまとめるノートについても、資料通りにまとめる生徒が多かったが、イラストの挿入などの工夫も見られた。

② 対話的な学びをより意識した授業（2年目）

新型コロナウイルス感染症が拡大し、生徒と生徒の距離をとらなければならなくなり、向かい合って話し合う活動ができなくなってしまうなど、授業のスタイルも大きく変えざるを得ない状況となった。

このような状況を前向きに捉え、授業改善を行った。

【中心発表者】

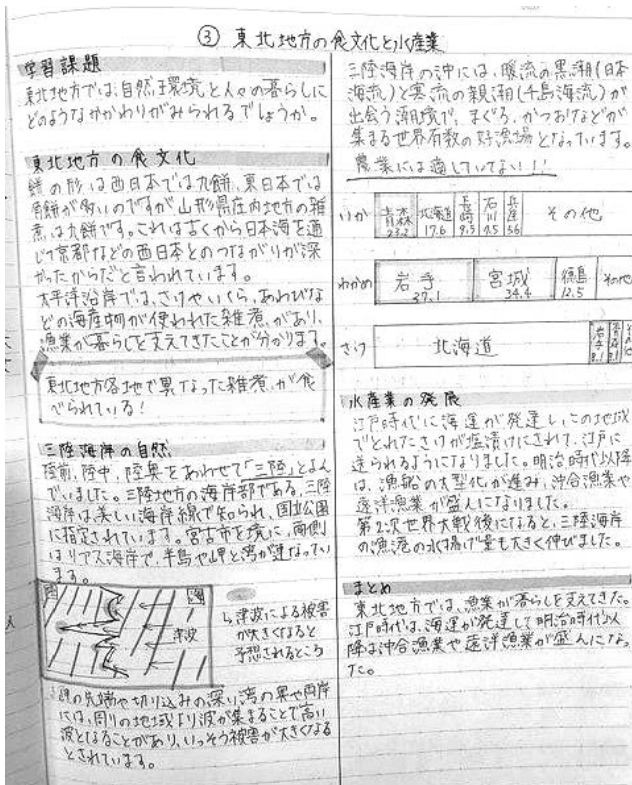
- 活動3では、話し合い活動が難しいため、挙手で理解度を押し量るなどの工夫をさせる。話が長くないようにするため画用紙等でフリップを作成する。

【発表者以外】

- 活動2の課題追究では班単位での話し合い活動や役割分担をやめ、個人内で課題探究を完結させた。意見交流は個々のノートを班内で回し、コメントを余白に記入してもらうこととした。

コロナ禍において、実際に生徒同士が対話することは非常に難しい。その代わりにノート点検の回数を増やし、ノートづくりの指導を丁寧に行った。ノート内で、〔学習課題⇒課題探究⇒まとめ〕が完結し、それぞれに工夫を凝らした十人十色のノートが作成された。これにより主体的な学びと対話の様子を評価できた。

▼ [生徒が主体的にまとめたノート例]



③ 深い学びをより意識した授業（3年目）

新型コロナウイルス感染症拡大が続いたため、これまでの取組を基礎としながら、いかに深い学びを実現するかということに重きを置いて授業を改善し、3年目の実践を行った。一人一台端末（Chromebook）が導入されたこともあり、大幅な授業改善を行った。

【中心発表者】 ※発表者は自由選択

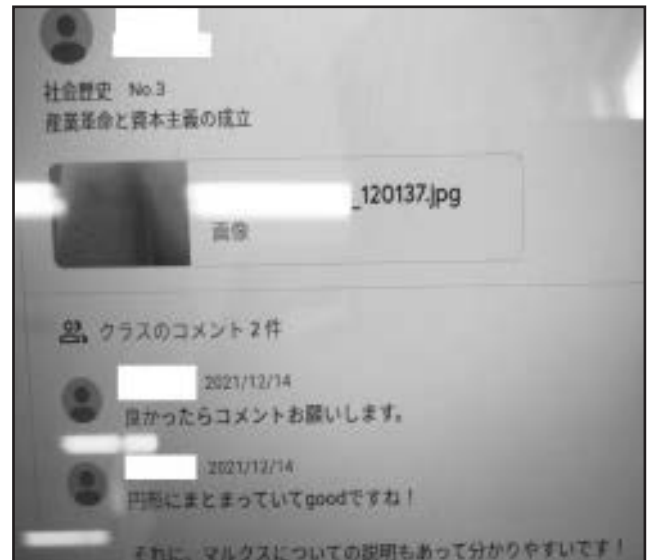
- 活動2では、プレゼンテーションソフトを積極的に活用し、より説得力のある説明を行う。
- 活動3の説明において、必ず「問いかけ」を行う。内容・形式は自由とする。
- 活動2の板書、活動3の説明・まとめにおいて端末内アプリケーションソフトを活用した、プレゼンテーションを行うこともできる。

【発表者以外】

- 活動2のノートのまとめでは、教科書や資料集中心のまとめから脱却し、インターネットも積極的に活用する。簡潔な言葉でノートにまとめる。
- 活動2において、ノートは端末で撮影した後、端末内のクラスルームに投稿し、生徒が誰でも全員のノートを閲覧できるようにする。他者のノートを閲覧し、良い点をコメントし自由に交流する。
- 活動3では発表者の問いかけに対してよく考え自分の考えを伝える。学びの過程をノートに記し、「まとめ」は自分の考えをはっきりと主張させる。

また、特別支援学級の生徒2名が通常学級で授業を受けるインクルーシブ教育を通年で行った。特別支援学級の生徒も端末使用により表現がしやすくなった。

▼ [端末内クラスルームでの意見交流]



端末の活用により、学級内にとどまらず、他の学級の授業の様子や発表（板書）を閲覧することもでき、授業時間外の「対話」や「深い学び」も生まれた。これにより学習課題に対する多様な見方や考え方を知る機会がこれまでの3倍（学級数分）に増加し、学びの幅を広げることができた。

▼ [生徒による発表の場面]



「問いかけ」では、説明に関する質問について、選択肢の提示や、消費者と生産者、政治家と国民など異なる立場を考えさせるなどの工夫が見られた。発表者の独創的な工夫（描画ソフトを活用した資料の提示や動画視聴、参加型授業など）を目の当たりにすると、そこからさらに工夫した発表が見られ、オリジナルの授業が各学級で行われ、学年内で共有化が図られた。

生徒による「問いかけ」を起点として、教師による「問いかけ」への反応も良くなり学習意欲が向上した。

(3) 3年間の授業実践を終えて～アンケート結果～

S授業の検証にあたり、アンケート調査を行った（2022年3月 中学3年95名回答）。

質問1：社会科の授業は楽しい。【はい86%・いいえ3%・どちらでもない11%】

質問2：社会科の授業は、主体的に取り組むことができる授業であった。【はい99%・いいえ0%・どちらでもない1%】

質問3：社会科の授業は、対話的に取り組むことができる授業であった。【はい87%・いいえ13%】

質問4：社会科の授業は、より深く学べる授業であった。【はい87%・いいえ13%】

質問5：自分が発表してみて、成長した点

- ・自分で工夫し、アレンジしたものを発表したりイラストを使ったりして、端末のスライドでより分かりやすい発表にすることができた。・どうすれば分かりやすい言葉で説明できるのかを考える力が付いた。・人前に立つ時緊張しなくなった。・知識の確認を大切にでき

た。・スピーチの力が付いた・自分の中の疑問や分からない所を見つけて解決し、それをみんなに分かりやすく教えられるようになった。・1年生の時は教科書を写していたけど、3年生になって簡潔にまとめられた。

質問6：授業によりどんな力が身に付いたか。（複数回答あり 括弧内の数字は全体に対する割合）

- ・要約できる力（95%）
- ・重要語句を確認できる力（82%）
- ・図や表の読み取りができる力（57%）
- ・学習課題に対応した課題追究ができる力（67%）
- ・まとめについて自分で考えて表現できる力（72%）
- ・時間内に終わることができる課題解決力（69%）
- ・仲間の良い点を見付ける力（75%）
- ・主体的に学ぶ力（71%） ・深く考える力（74%）
- ・仲間や教材と「対話」できる力（43%）

4 考察

上記アンケート結果により、3年間を通して社会科を好きになった生徒は約2倍となったことから、S授業は学習意欲の向上に大きく寄与できたと考えられる。またS授業の内容について、①主体的は99%、②対話的は87%、③深い学びは87%の生徒が実現できる授業であると実感していることから、かなり高い割合であるといえる。S授業により身に付いたと考える力は多岐にわたるものであり、生徒の自己有用感を高めると共に、非常に効果的な授業である。一方、校内研修会における授業交流では、理科で校内の教諭によるS授業が行われたことにより、他教科でも実施可能な授業であることが示唆された。

5 成果・課題

本研究における成果は、以下に集約される。

- ・S授業は、学習課題を意識して課題追究を個々に行うことにより主体的な学びが実現する。他者との対話や中心発表者による問いかけを通して深い学びを実現できる授業である。すなわち、自律的学習が行える。
- ・ICTの活用により教育効果を高めることができる。
- ・授業形態の工夫により他教科でも実施可能である。

課題として、今回の研究はアンケート等主観に基づくものが多くを占めており、テストの結果等、より客観的な尺度で教育効果を検証することが必要であると考えられる。また学びのスタイルを習得していく中で、より効果の高い授業へと改善を進めていく必要がある。